

題で出ている。その執筆者は、実はこの山内氏である。

「人生は短かい。しかし芸術は長い」といわれる。独歩の文学は、佐伯というすぐれた自然環境の中で成育し、明治時代を代表する自然主義文学者として開花した。その作品の中に、佐伯の山野と純真な人生をえがき、つくしているが、その独歩の文学の眞面目を知るのは、これからはあるまいか。山内氏のこれからの連載は、必ずや会員皆さんに、独歩理解のこよない手引きとなることである。(独歩の文学は、佐伯の宝である。)

佐伯市は、その発行する印刷物や観光パンフレットに、従来よく岡水田独歩の文学作品や、下宿先や文学作品にあらわれる自然・風物の写真などをとりあげている。それはよい。そしてそれは今後と同様であらう。

写真に写し取り、作品をとりあげたり、それは無料である。だからと言って粗雑・軽率な扱いは困る。どうかこの山内氏の評論が正しく受けとめられ、その理解の上には立って活用してもらいたい。

同様なことが、会員や一般読者に対しても言える。私は御土の文学として、独歩の文学を正しく受けとめ、ふるさと佐伯の山野を、美しい自然と地域の姿を、この上とも追求しようではないか。(おあり)

(附) 佐伯独歩会の会員へ

山内氏のこの文章は、これから長くつづく。史談会員で独歩会にはいっている、いわゆる両道かけておられる方はよいとして、独歩会だけの会員は、この際史談会の方に加入されてはどうかと思う。残部少々あり、皆さんからおすすめになってほしい。

各地便り

千葉市より「房総の書芸展」など

会員 小野 盛 雄

(八月三十一日ーはがき)

暑さの連続数日、東京・千葉は水不足で制限されていますが、ここでは生活用水に今のところ及んでいませんが、降雨を待望しています。(中略)

昨日は、県立美術館へ出かけました。館内は冷房され、快適です。「房総の書芸展」として、江戸から明治にかけての書家・学者・文人の書が展示されていますが、利説すらもできず、ただ目で見ると面白いです。

小説「野菊の墓」の著者、伊藤左千夫(大正二年没)の青簡がありました。内容は、金百圓の借金依頼状ですが、人間味あふれるようなところに興味をもって見ました。

先日、「日本の仏像」という本で、

「日羅は肥後の東北の国造(くわのみやつこ)阿利斯登(ありしと)の子であり、賢くして勇有り。百済王につかえていた。任那の復興を計った敏達天皇は、日羅を召還し、その献策を聞いた。」との文を見ました。

大野・直入郡方面で、日羅伝説云々は、耳にしたことがありましたが、日羅とは、実在の人であったのでしょうか。

ご自愛を祈ります。(下略)

(千葉市高洲 21613142)

年輪をかぞえるのは秋の水  
法師殿 余も後日ぞ 梅木に